

色

IRO

は

WA

匂

NIO

へ

E

ど

DO



PHOTO SHU FUJIWARA

特集 萬燈萬華大法要

平成十三年弥生一日発行 卷十八



PHOTO SHU FUJIWARA

安心（苦を抜き樂を与える）

花を見ると心が和む

桜を見ると心が浮き立つ

仏さまに手を合わせると

安心する

安らかな心をいただける

手を合わせる徳

心の苦をのぞき

樂をいただけること

特集 光と花の大法要

3



お釈迦さまの真理の花束

13



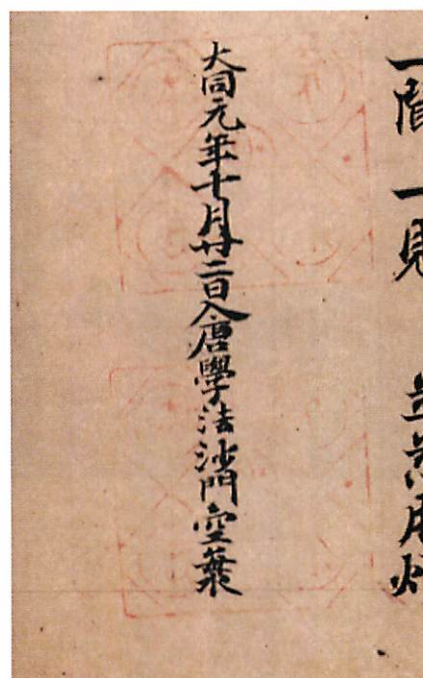
現代の道しるべ

15

墨蹟聚集の会報より

萬燈萬華大法要に参列して 西宮 紘 9

『梵字印』について 真保龍敬



11

本の紹介

17



特集 光と華の法要 萬燈萬華大法要



五百有余人の参列者によって献じられた燈明が道場を満たし華を輝かせ響きがうまれ天蓋に北斗が輝く

満願寺大塔建立十周年を記念して、
萬燈萬華大法要が勤修された。

満願寺では昭和五十九年の弘法大師千五
五十年御遠忌に、講堂の建立と大塔の建立
という未曾有の二大事業を発願した。昭和
六十二年春、講堂が完成し、そのおり萬燈
萬華をもって 講堂の落成を慶讃した。

すべて生花で道場を満たし、檀信徒ひと
りひとりが燈明をおあげする満願寺独自の
法要はその独自性と類い希な美しさ莊嚴さ
で大きな感動をよんだ。

平成二年には総檜造り檜皮葺きの満願寺
大塔が完成し再び萬燈萬華をもって大塔開
眼大法要とした。

そして十周年の今回参列者五百有余人とい
うかつての三倍を超える参列者をえて再び
萬燈萬華大法要の感動が大きく蘇った。

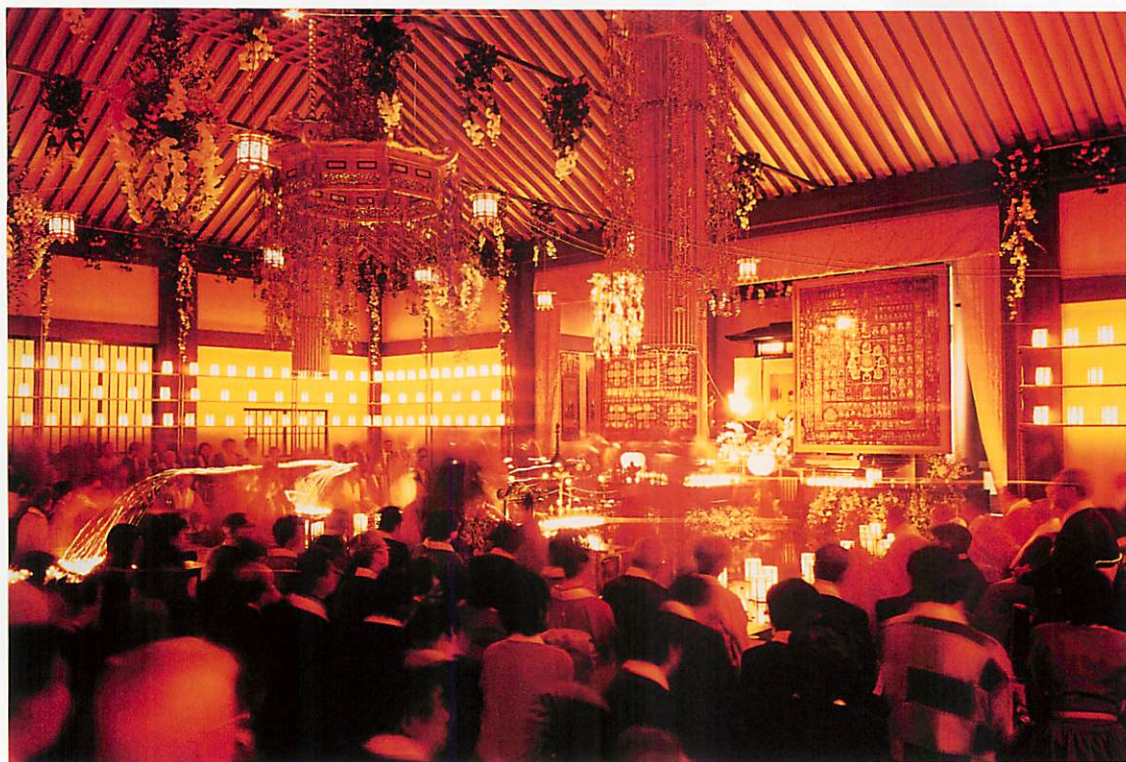


五色の天蓋と竜頭に飾られた幡が翻る中で、庭儀法要が勤められる



会奉行という法要全体を奉行する僧正に導かれ、お練りが山門から境内特設舞台へと進む。
白帳をまとった五大願衆が緊張した面もちで五大願（菩薩の五つの願い）の旗を掲げる。そして庭儀法要。

夕刻から大塔が開扉される。満願寺大塔は客殿北の池の対岸の高い位置にあり、基壇層内部が五十畳敷きの広さをもち大塔本体の一層と吹き抜けになった大空間を擁する独特の形で、その基壇には真舍利が祀られわき水が美しい音を奏でる。
基壇層では随時声明が唱えられまた、萬燈萬華法要中は大塔を臨む舞台で護摩供が勤修された。



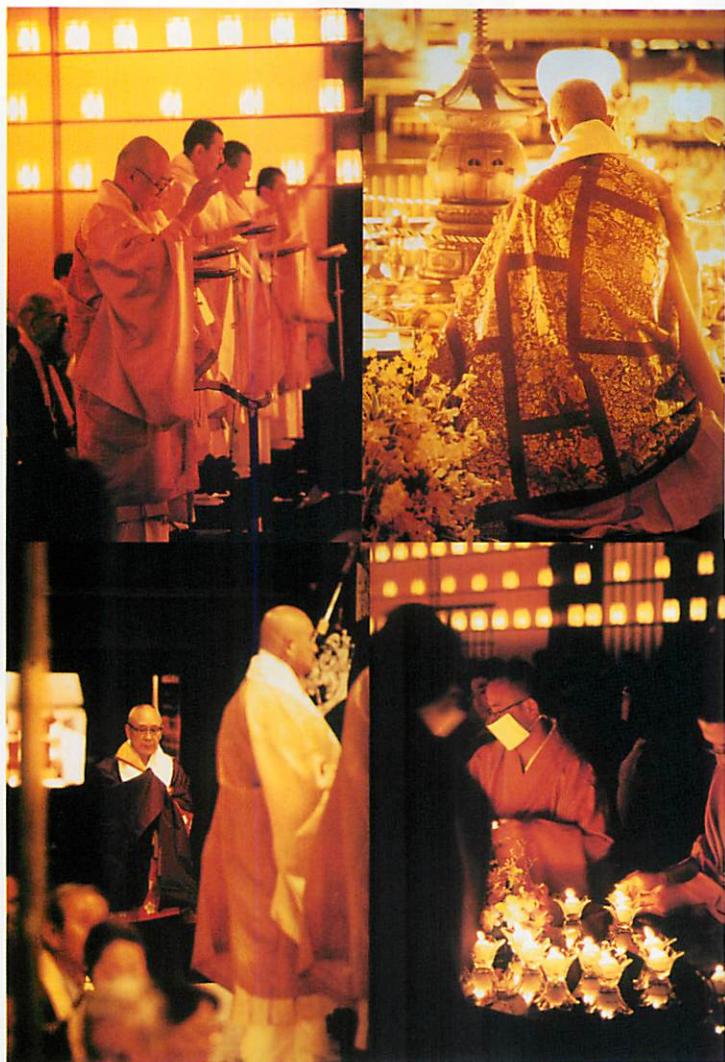
庭儀法要はもともと龍猛菩薩りゆうもうぼさつが南天の鉄塔を供養し開き、密教を相承したことになる。行われる大切な法要で、浄土など諸宗の二十五菩薩連行道や九品仏のお面かぶりも、この庭儀を模したもの。僧と参列者が一体となり般若心経を唱えると天空から散華が舞いこの法要の賛嘆する。

まだ漆黒の道場内部を大導師と職衆が進む。職衆が左右にわかれ内陣に列立し、本尊大日如来、金剛、胎蔵の両部曼荼羅、そして華で包まれた弘法大師に妙香、御洗米五穀などの百味が供えられる。その一つ一つが職衆の手から手へ丁寧に移されながら運ばれる。

そして燈明が献灯される。同時に境内特設舞台の二百人をこえる参列者が掌にともしられたお明かりを道場に運び献じる。大切に僧侶の手に移されたお明かりは外陣中央の献灯壇にともしられる。

外陣献灯壇にともしられるお明かりと内陣本尊にともしられるお灯明が美しい光の流れを起こし秘密莊嚴世界を現世に現す。





羅で織られた大衣を纏う大導師が、法要の趣旨を表白すると妙香の薫りが道場を満たし、二人の散華師が両部曼荼羅の前で座具をさばいて五体投地三礼すると華やかな声明が唱えられる。そして道場内部の三百有余人の参列者が内陣奥まですすみ献灯する。

参列者のお明かりが虚空を照らし満堂に飾られた花が一輪一輪その姿をあらわす。

そして両部曼荼羅の諸尊の姿もその一体一体が虚空に浮かんでくる。曼荼羅はお灯明の揺らぐお明かりの中で拝すると不思議な立体感で迫ってくる。とくに今日は一尊一尊が笑みを含んでこの法会を賛嘆されているように思える。妙香と声明と華と燈明が揺らぎながら一体となつてすべての参列者の心に響き広がっていく。そして一人一人の心も光と華で満たされていく。

不動明王を賛嘆する声明が唱えられ、十年ぶりのこの法要が大きな感動と喜びの中で成満した。
じようまん

弘法大師像（中央）と両散華師



お大師さまの萬燈会の願文

心の闇は生死のもととなり
如来の智慧の光は悟りの源となる
日輪は天空を輝かし月鏡は闇を照らす
三千世界と心の闇は照らせない

大日如来の輝きは宇宙に満ちて
あらゆる障りをのぞき心の闇をはらう

ここに空海もろもろの弟子とともに
萬燈萬華会をもうけて両部大曼荼羅の諸尊に献じ
父母、国、世間、三宝の四つの恩に報いん

虚空が尽き
衆生が尽き
涅槃が尽きなば我が願いも尽きなん

大塔は高く聳えて須弥山をも超え
献ぜられた燈明は

大日如来の白豪から放たれる光となって病をのぞき
供えられた華は笑みを含んで諸尊の眼を開かん

願わくはこの光と華の行によって自他一切を救済せん

擔

不動讃

頭

曩莫薩縛沒駄母地

薩怛縛喃

薩縛怛囉僧虞素彌

怛鼻惹囉始吠南

謨

素覩帝娑婆訶

真言声明の不動讃 不動明王を賛嘆する美しい旋律が示されている

萬燈萬華大法要に参列して

西宮 紘

光と花で莊嚴された空間の中を、大導師に導かれ、厳かな声明の波動の器に乗せられて、この法要の功德に浴するという、萬燈萬華の世界に参列できましたことは、私としては、はじめてのことゆえに、大変感動いたしました。最近、ほとんど書齋に閉じこもってキー・ボードをたたき続けるといった生活に終始してしまいましただけに、まるで夢のような光彩陸離とした別世界で、改めて莊嚴というものの素晴らしさ、そして真言声明による陶酔感を味わったわけです。その中で、最も印象づけられましたのは、声明、わけでも「不動讃」、その終わりの「南謨」のところに至ったとき、一瞬、たとえようのない酔いを感じたのです。これは私にとっては衝撃的で、凡百の音楽を遙かに越えた誠に素晴らしい音楽であり、何かお不動さんにぐっと引つ張られたような気がしまして、私の心がぐらっと傾いたような心持ちでありました。そして光、特に、献燈の際に手にしましたガラス器の燈明は、光がそのガラスにキラキラと耀映し、さらにはすでに献ぜられた燈明群のガラス器とも互いに耀映し合って光の交響を現出し、私をしばし茫然とさせたものです。心なしか手が震えているようでした。

この日、私はまず、大塔に案内されました。この大塔は、貫首様がお大師様からの霊告を受けて建立されたものだそうですが、原設計者はお大師様であり、独創であるとのこと。お大師様によれば、正しい仏の道は定慧門と福德門の二種があり、そのうち福德門は仏塔を建て、仏像を造ることをもって要と為すかなめとされています。見事な造りで、以前から庭の池を隔てて眺めていましたが、この日は、開扉され、御本尊大日如来を拝することができ、実に、幸せでありました。この大塔は胎蔵海であります、かつて、高野山の大塔と西塔を参拝しました折、大塔（胎蔵海）の御本尊は金剛界大日如来であり、西塔（金剛界）の御本尊は胎蔵海大日如来であることを確認したのでありますが、満願寺大塔もこれを踏襲しておられるようです。本当は、大塔の下にも入って見たかったのですが、参拝者が多く列をなしておりましたために、あきらめて御本堂の方へ移動したわけであります。

しばし講堂にて小休、多くの参加者と共に御本堂に入席、庭儀法要、供養塔開眼法要の後、大導師阿部龍文大僧正様の

上堂着座によりまして大法要がはじまったのです。洒水加持を受けまして、法要次第によってゆったりと進行之、さまざまな供物が供えられ、大導師様が法要の主旨を述べられました。お大師様の萬燈会願文をその中心に据えられたようです。しかし、それにしましても、次から次へと唱えられます声明には、実に新鮮でまた興味深いものを感じておりました。そして献燈、献華、実は、法要終了後、退席の折に、この散華の花びらがあちらこちらに散っておりまして、そのうち一枚を記念に頂いたのです。

大師様の願文の中に、このような萬燈萬華の会は、毎年一度行い、「虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願も尽きん」という部分がありますが、この文章を大導師様を通じて聞きましたときには、ひどく感動しました。この部分を述べておられる時の大導師様自身も何か感動しておられるようにお見受けしましたのは、私の思い過ごしであつたでしょうか。また、先程、声明の「不動讃」に特に感動したことを述べたのでありますが、大導師

様は、不動法を修されておられるとのこと、それゆえに、私自身、とりわけこの声明に動かされたのか、とも考えております。

法要終了後、舞台供養塔の前で式典が開かれ、最後に九谷焼の萬燈萬華杯で祝杯を上げたのでありますが、その直後に、私は辞したのであります。帰宅に長距離を有するからです。しかしながら、日頃、私は満願寺壇信徒の方々とあつたにお会いする機会はないのですが、この大法要がいかに多数の壇信徒の方々によって支えられていたかを目の当たりにしまして、何ともいえない感動を覚えました。私は、お大師様の縁で貫首様たちとの深い交わりに入るようになったのでありますが、私の人生の中で、ひとときわ一種特異な邂逅と考えているわけです。これから、致航山満願寺の衆生救済の手がより一層多くの人々に行き渡りますことを願ひまして、大きな感動を与えて下さったことの感謝と共にこの一文を捧げます。

弘法大師墨蹟聚集の全貌 七

一字經亦名三界寶尊經亦名如來說大悲門亦名聞如來法
不空得記亦名如來微妙法藏亦名如來妙究竟果亦名如
來微妙法眼亦名普照諸法寶炬亦名能斷一切耶見亦名顯
示諸法平等有如是等一切名字時文殊師利復白佛言世尊
如是名中雖皆甚深惟願如來為我定之說一名字令我奉
持佛言善男子此經決定應名守護國界主陀羅尼是名
字汝當奉持所以者何以二名依此生故今時世尊說此經已
一切世間天人阿僧祇乾闥婆等無量大眾聞佛所說皆大
歡喜信受奉行

守護國界主陀羅尼經卷第十

梵字印の解明に迫る

真保龍敬

大師の請来した『三十帖策子』には、特にその
第一、二、三、四、七、八帖には梵字の朱印が
七十数顆散見する。私が拝覧させて頂いたのは
今から三十四年も前のことで、この時の驚きと
解明への端緒が、この『墨蹟聚集』で朱色鮮明
に復元される。今回は最も代表的二葉が選択さ
れ公刊されるので、第三帙の『御請来目録（寶
嚴寺本）』及び第四帙の『仁王經良賁疏』にも
みられる梵字印と共に、その同一性が明白にな
るであろう。梵字印自体の究明は論文編の拙稿
で詳論するが、明晰な竹内信夫先生の御教示と
便利堂技術陣の成果によって、未曾有の全力
ラー印刷という阿部僧正の悲願の中で、『三十
帖策子』の研究と大師への思慕が一層深く豊か
なものになるのは、疑いない。

（しんぼりゅうしょう・善養寺住職）

屈北極而不厭龍智和尚八百不老
宗惠禪師摧耶支傾法之不思議
豈過斯藏乎慕覺之徒願聞未聞
頌曰

法無行藏隨人去來似寶難得得則心開
投身半偈豈論珍財孜孜書寫其來悠哉
願此介福國泰人蕃一聞一見並悉脫煩

大同元年十月廿二日唐學法清室衆

お釈迦さまの真理の花束



Make haste in doing good; check your mind from evil;
for the mind of him who is slow in doing
merit delights in evil.

Should a person commit evil;
He should not do it again and again;
He should not find pleasure there in;
Painful is the accumulation of evil.

見善不従

反随悪心

求福不正

反楽邪淫

人難為悪行

亦不敷々作

於彼意不楽

知悪之為苦



善きことは

いそぎおもむくべし

悪しきことにむかいては

心まもるべし

功德をなすに

心むなしきものは

悪のなかに

心おぼるるなり

たとえ

悪をなしたりとも

ふたたびこれを

なすことなかれ

悪の

なかに

たのしみをもつなかれ

悪つもれば

たえがたき

苦とならん

和みと癒しと安心

あるいはソフトインフラ

(心の基盤整備)

今年の新春初詣の参詣者は例年より多いという。二十一世紀の初めということなのか、老若男女年齢を超えて増えている。

若いカップルの女性の方が境内の小さな祠やお堂に丁寧にお賽銭をあげて手を合わせている。男性がめんどくさそうな顔をする。女性が「こうやってお賽銭あげて、手を合わせるとなんか安心するし、いやされるっていうかさ」と話していた。

最近『癒し』あるいは『癒し系』という言葉が目につく。『癒し』は英語のヒーリングの訳で心を安らかにさせたりすることや物ついて使われている。『癒し系の色』といえたとえれば緑でそれを見ることで心が和みストレ

スから解き放たれるということだし、『癒し系の薰り』といえれば緊張をおさえて安らかな気持ちになれる薰りをいう。そして雑誌でも商品でもこのキーワードが消費者に受けるという。『癒し』という言葉は今や寂しさを解消するものや、体をほぐすマッサージにまで意味が拡げられている。

もともと『癒す』という動詞を名詞化して使っている。年輩の方は『癒し』と聞いて『癒す』が語源だとは思わない。むしろ『卑しい』を連想されるだろう。私も『癒し』という『し』で終わる音感の悪さと『卑しい』を連想するのでほとんど使わない。しかし『癒し』という言葉が商品開発のキーワードやコンセプトになったりするので『癒し』にふれてみたい。

『癒し』を求める消費者がそれほど多いと言うことは、それほど多くの人の心が痛んでいた、疲れ切っていたり、あるいはいつも高い緊張感にさらされていることになる。ビデオカメラの宣伝で、記憶媒体をお互いに交換することで子供たちの運動会の徒競争を

親たちが第一コーナーから第三コーナーまで張り付いて撮影し、あとでお互いにビデオカメラの記憶媒体を交換すれば子供の徒競争を余すところ無く撮影出来るという宣伝で、最後に子供たちが「それだけ気を抜けないってことだね」と呟くシーンがあった。今は子供でもストレスという言葉をお口にすらし意味を理解している。

高度情報化社会になるほど緊張感やストレスは高まる。

二つの基盤整備

ハードインフラと

ソフトインフラ

今や『IT革命』といわれ高度情報化が加速度的に進んでいく。そのための基盤整備(インフラ)も年々前倒しされている。そしてそれにもなっている人々のストレスは高くなり『癒し』を求める人がより多くなるだろう。

しかし心を和ませ安らかに癒すための基盤整備(ソフトインフラ)など

は全くマスコミからも政治家からも識者からも出てこないのはなぜだろう。

歴史上の政治の頂点に立つものの多くや権力者が政争や戦いに勝つと先ずすること、それは心の基盤整備、人心の掌握と人心の安寧を計ることは為政者の最優先事項で、たとえば徴兵の延期、大規模な減税等々。

聖武天皇は東大寺と国分寺を造営して、人々の心の安寧を祈り、藤原冬嗣な興福寺に南円堂を造り庶民が参詣できる開かれた寺院を建立し、弘法大師は高野山を開き四国八十八所という誰もが参詣でき歩いて回れる曼荼羅世界を生み出した。また室町幕府を開いた足利将軍は町割りや道路橋を架ける基盤整備（ハードインフラ）をする一方、町割りをした一町ごとに辻に地藏菩薩をまつり心の基盤整備（ソフトインフラ）を行った。信長でさえ戦に勝つと城を開け祭りを行人々の心をまづ和らげることに関心を砕いた。

日本中が急速な都市化で辻にある小

さな祠やお堂が取り壊されたりして年々祈る場、手を合わせる場が人々の前から急速に姿を消しているが、今の日本の人心の荒廃と決して無関係ではないだろう。

家庭の中もインターネットが普及し、近い将来はテレビや電話以上に普及するだろう。電話会社も電気産業もそのための基盤整備は進めているが、家庭や一人一人の心に情報化のツナミを受け止める心の基盤整備をしないと社会や人々はさらなる高い緊張感に苛まれる。

まず家庭にはどんなに小さくても狭くてもいいから祈る場を、そして会社や学校病院にもソフトインフラをしないといけない。逆にこのソフトインフラに成功した組織や地域は人が集まり活性化され、より豊かになっていくだろう。

安らげる場、和める人、安心できる環境に人は自然と集う。



『見立ての手法』

磯崎 新

鹿島出版会

日本独自の空間認知の方式は、芸術表現や生活感覚の全域にわたって、西欧のそれとは基本的に異なった形式を生むことになった。その相違を端的に言えば、西欧においてはデカルトに代表されるように、空間と時間は均質で無限に連続するという絶対的なイメージが確立し、近代のあらゆる思考の基準になったのに対して、日本の空間と時間は、むしろ、遍在し、分断された相対的なものであった。ここでは、空間と時間が未分化状態でいり混じっている。空間の認知はそれ自体でできず、常に時間を介してのみ可能であった。そして、時間はまた均質な流れでなく、瞬間的に生起するものと考えられていた。以下、そのような差異を具体的に拾いあげてみよう。

時計

音楽

建築

中心の軸は、西欧においても、古典主義時代以来とりわけ重視されていた。しかし、建築の配置の方式は、必ずといっていいほどに日本化され、変形が加えられる。その典型のひとつは、**山中に伽藍が点在する密教寺院**で、あえて軸をうねらせ、自然の地形的変化のな

かに建物を埋没させている。あるいはまた、書院造りと呼ばれる近世に発達したパレスの布置にもその傾向はうかがわれる。

庭園

舞台

絵画

図像



建築の配置のみならず、図像の構成にもう

かがわれる。例えば**マンダラ図**は、中国を通じてインドより渡来した当初は徹底的に厳密な幾何学的な仕組みをもっていた。ところが、それを日本独自のマンダラに展開する過程で、幾何学性が失われて、むしろ自然の光景のなかに、シンボリックな記号が分散して配列されるようになる。それと同時に、その記号（たとえば仏像）が、画面の背後から出現する瞬間の表現が重視されるようになる。

時間とともに、あらわれ、流れ、うごくことをひたすら空間内に定着しようと試みたといっている。ここにも、空間を時間と分離せず、常に相貫させる思考がみられるだろう。

（『見立ての手法』より）

『アルフレックス・ロ・

イタリーア』

保科正 著

集英社

アルフレックス家具を使って二十年以上になる。美しいデザインに惹かれて買ったが使うほどに馴染んできて飽きない。少しずつアルフレックスの家具が増えてくる。自らの写真で綴るアルフレックスと私とイタリア。読んで見て楽しい一冊。



『遠く永い夢』

茶屋 二郎

日新報道

『本能寺の変』

『関ヶ原』という我々にとってもっともなじみ深く興味がわく歴史上の事実を、大胆な二つの仮説を軸に克明にその時代を浮かび上がらせるす長編小説。歴史が小さな行き違いや思わぬ人の縁の綾の中で大きく動きだし、ひとたび動き出した流れがさらに大きな激流を起こしていく。茶屋二郎は他に仏陀を描いた『目覚めた人』日本書紀を独自の解釈で読み解くものなどがあり、いずれも好著。



『100万回生きた猫』

講談社

何度生まれ変わっても何度生まれ変わっても生きること一度も喜びを感じない猫が、一匹の猫との出会いで初めて生きる喜びと悲しみを知る。そしてその喜びと悲しみを知ってから猫は二度と生まれ変わらなかつた。



『クレーの天使 谷川俊太郎』

講談社

スイスに生まれたクレーは音楽と詩と絵画に幼いときから才能を開く。新しい絵画運動を起こしバウハウスの教授をしたり芸術全体の統合性を考えていた。クレーの絵の美しさは誰の心にも感動を呼ぶ。心の悪を喚起するものが多い中で心の天使を呼び覚ます貴重な本。





次回発行は 7 月 1 日予定

特集 真言密教と日本文化 1 能の世界

Editor RYUJU ABE Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA Special Contributors/RYUICHI ABE KO FUJIWARA
 Editorial Staff/ MIWA SAMURO KOJI TOKUMARU REIKO ONUKI KAZUFUMI MOTOYAMA IIDA SHUNJI
 HOMEPAGE DESIGN MASAOKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA+BENRIDO Printing KORINKAKU
 PUBLISHER RYUBUN ABE EDITOR RYUJU ABE EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIIN S.H.C

〒158 東京都世田谷区等々力 3-15-1 電話 03-3705-1622 ファクシミリ 03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第十八号 平成十三年弥生一日発行